

田中司教が語るエピソード(1)

昨年(一九九七年)現役を引退された田中司教は、インタビューに伺った時には健康も回復され二十一年間の司教生活を懐かしく振りかえっていただきました。今月からしばらく掲載していきます。

▼一九七六年京都司教に任命を受けられたのです。

◆そうですね。話を聞いた時、いろいろなことが頭に浮かびました。旧約の預言者たちのように私は共にいるという神の言葉を思い出しましたね。そして、信仰の心をもって、神は共にいるという言葉を受けて「京都司教職を受任します」と書きました。それから、一九七六年九月二十三日、洛星高校の講堂で司教叙階式を行いました。高松から京都に来たのです。その時、古屋司教から司教職の印の赤い帯とズケッタなどをいただきました。今と違ってその頃はスリムでしたね。

後ですね、司教叙階式の時の挨拶で私は三本の柱、すなわち「みことばを大切に、秘跡を大切に、相互愛の実行に努めましょう」ということを話したことは印象深



いです。

▼紋章について聞かせてください。

◆イエスはダビドの子孫ということで、ダビドの星を一番上に置き、中心にイエス、それからミトラとバクルス、そして、教区の一府三県(京都、滋賀、奈良、三重)の印をいれ、一番下にイエスにならぬ砂漠の道を歩くということで砂漠をあらわしました。残念ながら司教座聖堂にかかげていました紋章には砂漠は描くことができませんでした。

こうして、着任しましてからは、一日も早く教区内をまわってくださいということで、忙しく各地区をまわりました。また、学校、施設関係も行きました。そうですね、京都北部をまわった時、西舞鶴教

会で泊まり翌日起きると一面真っ白な雪景色で、それでチェーンをつけて宮津、峰山などをまわったのは思い出ですね。

▼外国からのお客さまが多いとのことですが。

◆着任してから、教区内を訪問している間にも本当に多くのお客さまがいらつしやいましたよ。京都は必ず訪問したい場所のようです。それで、私は、観光コースを作りまして、平安神宮、御所、二条城、金閣寺、東西本願寺、三十三間堂

これが一日の行程です。平安神宮はその色鮮やかさが外国人には喜ばれますね。案内で思い出すのは、FABC(アジア司教協議会)という会議が東京でありましてその参加者二百名が京都観光をすること、宿泊の世話から観光案内まですべて用意しなければならなかったの思い出ですね。

▼一九七六年〜一九八〇年の五年間の中から印象深いことをお話しください。

◆そうですね。一九七六年十月にカーディナル・ピネドリという諸宗教長官が来られました。この方が来られて「あなたはベビー・ビショップだが、京都の司教であれば、諸宗教の担当をしなければ

なりませんよ」と直接言われた一言で現在も続けています。諸宗教のことと関わることは、私の運命的なことのように思います。カーディナル・ピネドリという方は、日本における諸宗教の対話について道を開いて下さった人で、私にとって本当に印象深い人です。日本は、一神教ではないので、諸宗教が何か共にやりましょうという時とてもやりやすい国のようです。そのため、バチカンも日本における諸宗教の対話ということが高く評価してくれています。

それから、特に神社神道を中心とした宗教者とピネドリーを中心としたバチカンの関係者がイタリヤ北部のネミというところで会議を催しました。会議と云いましても勉強会です。これが諸宗教関係で一番最初の私の仕事となりました。この時、パウロ六世に謁見したのですが、この十日後に亡くなられ、私達の謁見が彼の最後の謁見となりました。また、これは余分の話ですが、ネミに行くときソビエトの旅客機に乗り、帰りもシンガポール経由で、旅費を節約したのですが大変でしたよ。シンガポールではシンガポールなまりのシンガの大司教と英語が通じなく

て苦労しました。

その後、WOREC(世界宗教者倫理会議)、WCRP(世界宗教者平和会議)というのがあるのですが、WCRPも私の印象深いですね。村上真理雄神父は「WCだけ知っていたらよかったけど、田中司教さんのおかげでWCPPも覚えることが増えた」と言われましたよ。そして、この頃から、倫理、平和ということに宗教者がイニシアチブをとらなければならぬという気運が高まってきましたね。私は、このため、東京と京都を二カ月ごとに行ったり、来たり教区の仕事の合間にしましたね。本当に休む暇なしでしたね。それほど日本における諸宗教対話というのは期待のかかっていることとです。

▼その他なにかありますか。

◆そうですね。一九八〇年からは教区ビジョンのたまたきだ作りのためにパチカン公会議の再勉強会が始まりますね。神父が回り持ちで有志の人を対象に毎週火曜日に学習会を始めました。教区ビジョンについては、それだけでまともにお話ししましょう。(つづく)

聖霊の働きを理解するための取り組み

日本カトリック司教協議会
大聖年準備特別委員会より、
今年になって、大聖年の準備
第二年目・テーマ「聖霊」に
ついて取り組むための手引き
が出されました。以下に一部
を紹介いたします。

聖霊来てください。

あなたの光の輝きで私たちを照らしてください。

●聖霊の年

一九九七年の待降節第一主日前晩の祈りから、大聖年直前の準備第二年目に入りました。この一年はとくに、私たちキリストの弟子たちの共同体とともにいてくださる聖霊にささげられます。キリストは十字架の上で人類を罪と死から解放してくださいましたが、このキリストとの生きた出会いを現代においても実現させてくださるのが聖霊です。

キリストのことばを味わいキリストの生涯を見つめながら、聖霊の尊きに身をゆだね、福音をあかす共同の歩みとともに歩む以外に、新しい千年期を準備することはできません。

●小教区での取り組みのため

教皇は、教会を導いている聖霊の働きについての理解を刷新するように、と呼びかけておられます。そこで、キリストとの出会いを実現させてくださる聖霊を体験的に理解するための取り組みをいくつか紹介します。

一つ目は、皆さんよくご存知の典礼聖歌「聖霊の続唱」を黙想しながら「聖霊の現存働き」を味わうための手引きです。二つ目は、「教会」という言葉の意味を確認し合うための手引きです。三つ目は、私たちの実際の生活から聖霊の促しを見直していくための手引きです。

それぞれの共同体の実状に合わせて、これらの手引きを利用してみてください。また聖霊に対する理解を深めるための皆さまの工夫や取り組み方を教えてください。互いに協力し合うことで聖霊の導きをよりいっそう理解し、「イエス・キリストにおける神の国の完全な現れを準備する」ことができますよう、心からお祈りしております。

ビデオ「みながひとつになるために」利用していますか

聖霊の年を始めるにあたって、大塚司教より、ビデオメッセージ「みながひとつになるために」二千年に向かつて聖霊の年を準備する」が昨年配布されました。みなさんは、すでに見られましたか。

加悦教会では、四つの地区で毎月それぞれ家庭集会をしています。担当司祭の横田師がビデオ付きのテレビを持ち込んで、ミサ後みんなでビデオを見ました。ビデオを見た感想は、「普段はなかなか実感できないですが、ビデオを見ると現在の教会の動きがよくわかって、とてもいい」ということでした。

ビデオを見ただけでは、それを材料にしての話し合いがむずかしいので、今年になってシナリオが配られました。ビデオの中のメッセージの確認や、分かち合いの参考になると思います。

ビデオを見た感想や、ビデオを使つての取り組みを編集部へ送り下されば、順次教区時報に掲載したいと思えます。又、来年の御父の年のためのビデオも作成予定です。御期待下さい。

田中司教が語るエピソード(2)

▼一九八一年二月に教皇訪日がありましたね。この時のことをお聞かせ下さい。

◆そうですね。教皇訪日というところで、前年(一九八〇年)の九月から準備会を設けて用意しました。私は諸宗教の担当をしていますから、諸宗教の方々に教皇様の接見のご案内をもってそれぞれ回ったり、その他にもいろいろのことで忙しかったですね。そして、翌年二月二十三日教皇様が来られました。諸宗教の方々には次の日の午前中早い時間に会われたのですが、その時「最澄」の言葉を引用して挨拶されたのは皆、ビックリでした。改めて自分達の教えについて考えられることになったこととです。この後も教皇様は非公式とはいえ日本を代表する多くの方にあわれ過密スケジュールをこなされました。

▼心に残っていると思いますが本当に流暢な日本語でしたね。

◆そうですね。全てのスピーチを日本語でされ、それも本当に流暢な日本語でしたよ。「戦争は人間の仕業です。戦争は……」という有名なことばがありますが、それを

翌日幼稚園の子どもがまねしたくらいですからね。そしてね、これをきっかけに日本語で説教しなかった教皇大使が日本語でするようになったんですよ。

これはアピールとは関係ないですが、広島では教皇様といっしょに食事をする機会がありました。その時、「あなたは何処の司教ですか」と聞かれ「京都です」と言う。「京都のことは天皇からも聞きよく知っています」と言っただけで、さうして、他にも名古屋については、ご自分がトヨタ車に乗られているからご存じでした。そして、広島も慌ただしく動きまわりその日のうちに最終訪問地、長崎に移動しました。

▼二月二十六日長崎は大雪だったそうですね。

◆すごい吹雪でその中で殉教者のミサを松山球場で行ないました。球場は一面真っ白でした。だから、特に五島から来た人たちだったのですが船で泊まり疲れと寒さで五百人位が倒れ救急車で病院に運ばれました。教皇様も洗礼式もあつたので手がかじかみながらでしたよ。側にお湯を用意はしてしまし

たが大変な日になりました。しかし、寒さの中で長時間に及ぶミサでしたが、教皇様は寒さを吹き飛ばす熱意でミサを行なわれました。熱意ということならシスター達もすごかったですね。東京でもそうでしたが、長崎でも日頃おとなしいシスター達の熱狂ぶりはすごかったですよ。信者さん達をはねのけてました。それから、五島の人たちですが、彼らは黒船でババ様がやって来るといことを信じていたので彼らも船で来たのです。そして、この時何人かの隠れキリシ

タンの人が出てきました。教皇様はその日の夜九時に長崎からアンカレッジ経由で帰られたのですが、振り返ってみますと、教皇様の訪日は対外的にも大きなアピールになりました。マスコミもそれまではプロテスタント用語が主だったのが、カトリック用語を使うようになったり、私自身も小さい頃はカトリックの信者だから、教皇様の訪日で初めて福音宣教の自由さを感じました。

(つづく)



田中司教が語るエピソード (3)

▼一九八一年十一月二十三日に教区ビジョンを発表されました。いろいろご苦労があったと思いますが、お聞かせ下さい。

◆当時の若手神父、今はもう若手じゃないですけど、彼等から「教区ビジョンを作ればどうか」という記事が教区時報(第六十号)に掲載されました。それから私のところに話がありました。彼等は「どうせ、司教はこんなことはやめようと言われると思いますが」とも言ったのですが、私は「よし、やろう。それはいいことだ。」とOKしました。そして「多くの困難があったとしても、やはり私は京都教区民が互いに手をつないで、社会の福音化のために尽力する一つのビジョンを作りたい」と思いました。

ビジョン作りの準備は一九八〇年の一月十三日から初回は長江司教にお願いして第二バチカン公会議文書の再勉強会から始まりました。勉強会は毎火曜日の午前と午後、教区付司祭全員が順番で講師を務めました。それから、一九八一年になりました。からは二、三ヵ月に一回ビジョン準備合宿を北白

川教会で繰り返し、毎回たくさん意見がだされ、それをまとめていきました。この間の詳細は教区時報をご覧ください。それが、大

テーマ「社会とともに歩む教会」、具体的課題として「教会の魅力と一致、祈りと典礼、教会組織の近代化、青少年の育成」です。このまとめが教区創立記念日(一九八一年十一月二十三日)に読み上げられた時、これまでにビジョン作りに関わって下さった多くの方々、そして教区に費やしていただいた皆様方のエネルギーに本当に心から感謝しました。と同時に、教区も聖霊の働きのもとに一新されると感じました。私は、改めて司牧



ビジョンを読み上げる田中司教

方針ができたこと、それを自信をもって遂行していくことへの自覚が湧いてくるのを感じました。▼ビジョンの具体化ということではどうでしょう。

◆たくさんありますよ。大きなところでは一九八六年二月に発足した宣教司牧評議会です。これはビジョン宣言文がでてから五年経過していたこともありましたが、まず、ビジョンの見直しを手がけていたことができました。そして、一九八七年には教区創立五十周年と第一回福音宣教推進全国会議(NICE)を迎えるということ、とにかく宣教司牧評議会は発足以来積極的に多くのことに取り組んでいただき答申もたくさんできました。本音のところは大変でした。ですが本

当にビジョンの具体化のためによく働いていただきましたね。その中で特に青少年の問題が見直され、青年センター、アジア交流委員会(KYOSIA)などの青年を中心とした活動が生まれました。

その他、典礼では聖体奉仕者の任命、合同洗礼志願式、福音センターを中心に聖書講座、信徒使徒職養成コース、混声合唱団、コーロチェレステの結成です。また、平和への歩み実行委員会もでき、社会問題にも取り組むようになりました。外国人登録法の問題で大阪入国管理局に行ったのは印象深いです。さらには、子羊会を中心に障害者の方々の問題などいろいろなところでビジョンの具体化のために活動していただきました。

こうして、話しながら振り返りますと順風ばかりでなく、逆風の時もありましたが、私は京都教区の皆さんにどれほど支えられ、励まされているかということを感じ、今日まで私の宣教司牧のエネルギーとさせていただいたことを感謝しています。また、本当にその一つ一つの活動に関わっていた皆さんにこの場をおかりしまして改めてお礼申し上げます。

田中司教が語るエピソード (4)

▼諸宗教担当を二十年もしておられたようですが、それについてお聞かせください。

◆日本の諸宗教は次の五団体にまとめられています。それらは①神社神道、②教派神道、③全仏、④キリスト教連合、⑤新宗教連盟です。それに世界宗教学平和会議(WCRP)と世界連邦宗教日本委員会という二つの団体が諸宗教の各団体から送られた代表者によって構成され、諸宗教間の交流のために活動しています。その他、三・四年に一回ですが、東西霊性交流という禅宗とベネディクト会による一カ月に及ぶプロジェクトがあります。

いずれも初めから難しい教義、典拠、教団運営について話し合うのではなく、先ず、お付き合いをして友達になることが大切でした。特に、一九八一年の教皇訪日と一九八六年のアッシジサミットでは、その功を奏し、カトリックは日本で高く評価されるようになりました。

教皇の呼び掛けで世界中の宗教者が集って行われましたアッシジでの「宗教者平和の祈り」の集い



アッシジでの宗教者平和の祈りの集い

に、私はヴァチカンのスタッフの一人として参加し、日本からいらした仏教、神道、キリスト教、諸宗教組織の代表者の接遇をしました。その時のことが思い出されます。この集いは、自らの宗教的伝統を忠実に守り、自らの信仰を貫きながら、しかも今日の悩める世界に対して平和と人間に献身するという宗教共通の決意を証しすることが目的でしたから、「平和の祈り」は各宗教の慣例にしたがって行われました。日本からの皆様も、仏教の方は法衣に袈裟を掛け

て数珠を持って祈られ、神道の方はしめ縄を張って神事の場をつくって東帯装束で祈られました。この時、しめ縄を張り渡すための竹がイタリアでは手にはいらず、葦を代わりに使った岩だらけの地面に苦勞してたてた事などが懐かしく思い出されます。

その後、このアッシジの精神を受け継いで一九八七年の八月に、比叡山天台宗が開創千二百年を記念して日本における宗教者の平和の祈りの集いを「比叡山宗教サミット」と名付けて開催されました。この時、私は運営委員の一人として色々な宗教の方と共に会議を重ねて準備をしました。初めのうちは、なかなか捗りませんでした。皆の努力と協力によってよい企画ができ、素晴らしい集いとなりました。特に、英国、フィリピン、オーストラリア、韓国からきた十二人のフォコラーレ(カトリック系の神の愛に基づく精神運動団体)の子供たちが「全ての人が一致と平和のために働こう」というメッセージを発表し、同時にそれに賛同する世界の十四万六千四百余名の人々から集めた署名を山田名誉議長に手渡し、参集の人々を感激させました。

その後、一日だけの祈りの集いですが日本国内レベルで続けられました。そして、第一回目から十年経ちました一九九七年の八月に、比叡山宗教サミット十周年記念の平和の祈りの集いが行われました。四日間の日程で行われましたが、第二日目の日曜日でありましたので、河原町教会で「子どもたちの未来と平和を祈るミサ」がアリンゼ枢機卿司式のもとキリスト教連合によって日本語、英語、ラテン語をまじえて捧げられ、座席が足りない程の多くの人が参列し、心を一つにして祈りました。これは非常に意義あるものでありました。

また、私はカトリックの諸宗教担当司教でしたから、日本のカトリック否バチカンの代表として、日本の色々な宗教の式典にお招きを頂きました。例えば、二十年間に天台座主お二人と永平寺貫主お二人が遷化されましたので、葬儀、晋山式に参列させて頂く機会がありました。そこで、日本において私共は神仏の大多数の中の極く少数派ですから、相手の習慣、作法をよく学ばなければならぬと思えました。これが互いに理解し、協力しあう第一歩であると痛感しました。(つづく) 文責・編集部

田中司教が語るエピソード(5)

▼キリシタン関係の研究についても熱意を燃やされたとお聞きしておりますが、如何ですか？

◆そうですね。京都のキリシタンの活動状況を歴史的根拠に基づいて明らかにして、多くの人々に知らせることが必要と考えてキリシタン研究に力を注ぎました。それについての思い出は沢山あります。

▼先ず、高山右近についてお聞かせ下さい。

◆高山右近についてですが、非常に熱心なキリシタン大名であった彼は、幼少時を大和榛原の沢城で過ごし、その間に城主の父・高山飛騨守と共にバテレンから洗礼を受けました。すなわち、榛原は右近の受洗の地であります。この事から、私が司教として着任する前から五月五日の子どもの日に、大和榛原の有志と奈良県下の教会の人々が右近を偲んで、合同で子どもを中心とした集いをしていました。私もこの催しを続け、ある時には山上の沢城跡で、青竹で造られた祭壇にお琴と詩吟を採り入れた答唱詩篇を用いて司教ミサを捧げたこともあります。参加者が四百〜五百人と多くなってきた

頃からは山上での催しは止めになり、今では山麓の「高山右近受洗の地」の碑の前と特別に確保されたれんげ畠で、地域の子供たちも交えて、高山右近を讃えたみことばの祭儀が盛大にとり行われています。この日には町長さんも必ず来られ、婦人会の方々が右近饅頭や金魚すくいなどの店を出し、大きな幡をも立てて、さながら日本の村祭りのような趣でした。そして、昼食後には、れんげ畠で子供たちの運動会や踊りが催され、地域の人々と教会の人々が一緒に楽しく過ごす大変有意義なひとときとなっていました。



▼次に日本最初の殉教者である日本二十六聖人についてお聞かせ下さい。

◆日本最初の殉教者である二十六聖人についてですが、彼らの殆どが京都で捕えられ、耳削ぎと市中引き回しの刑を受けてから殉教の地、長崎へ向かったたので、彼らが活躍した「南蛮寺」と呼ばれていた聖母に捧げられた教会跡と思われる四条堀川で、はやくから少しの有志によって彼らを偲ぶ特別のミサが捧げられました。また同時に、「都人が知らない京都の偉人二十六聖人」を多くの人に知ってもらおうとPRに力を注ぎ、小寺ビルのホールが満員になる程たく

さんの人が特別ミサにあずかっていました。一九七九年に、色々と史料を調べた結果「南蛮寺跡」が四条堀川南の「だいりす町」であることが判明し、現在その地に建っている四条病院の外壁に銘版が取り付けられて、七月十四日に駐日スペイン大使臨席のもと祝別式が盛大に行われました。



フランシスコの家で

田中司教が語るエピソード(6)

▼司教様はアジアの司教ということで、屢々アジア各国に行かれたようですが、それについて簡単に話して下さい。

◆アジアのカトリックは日本からバキスタンまでの十六の司教団教区で、教皇パウロ六世がフィリピンに来られたのを機会にFABC(アジア司教協連盟)を組織し、たびたび集って意見の交換や現状視察などが行われました。私も若い時には年二・三回その研修会に参加しました。第一回目のものは一九七九年五月にフィリピンで行われたFABC・OHD(人間開発)主催のものでした。マニラに集合し、オリエンテーションの後、班別され、私は四人組の一人となってインファンタに一週間滞在しました。そこでは司教様のご指導が良く、信徒たちが熱心で、特に社会問題についての意識の高い人が多かったようです。信徒たちとの分かち合いが一番に質問されたのは日本からの司教、私でした。「住友バナナ・プランテーションを知っていますか？」と尋ねられました。私はインファンタのそれについて無知でしたので「残念な



がら、不勉強でそれについて知りません」と答えました。当時はマルコス政権時代で、日本企業がフィリピン政府に多額の金を払い、貧しい農民を山上に移住させて最新式のバナナ農園を日本の為に作っていたのでしよう。その他、小教区をアチラコチラ見学して、多くの人々と会話を交わしました。四人の司教の宿泊は教区の木造建ての三階の広間で、蚊帳を吊って寝ました。その時に初めて最後ですが、他の司教様の英語の寝言を耳にすることができました。今

はそうではないと思いますがその時には三階に洗面所がなく、顔を洗うのも、歯を磨くのも一階にまで降りて行かなければならずよい運動にはなりませんが、少々不自由でした。

一週間インファンタで過した後、再びガタガタ道を通ってマニラへ帰り、それからバギオの神学校に行きました。そこでは、班別に過ごした一週間の体験報告と反省をグループになって話し合いました。言葉は半分位しか解りませんが、良い勉強と体験でした。



上座仏教僧と

▼その他にも色々なところに行かれましたか？

◆はい、一番数多く行ったのはアジアの中心であるタイだと思えます。そこでは上座仏教の様子などにもふれ、学ばされました。上座

仏教では、朝早く托鉢してから朝食を摂り、正午前にその残りを食べ、午後は全く断食をします。日本の仏教とは全く違った修行の生活のようでした。

タイの他に、FABC研修会へ出席の為に去った国は韓国、台湾、ホンコン、マカオ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア等で何回行ったかその回数はわからない程です。会議の内容は別として、度々集って同じアジアの兄弟司教として親しくなるところに意義があると思えます。(つづく) 文責・編集部



田中司教が語るエピソード (7)

▼司教様は司教団と一緒に何年かに一回ローマを表敬訪問しなければならぬと聞きましたが、その様子をお話しして下さい。

◆五年に一回司教団はそのサイズに応じて一班、二班、三班と分かれてローマを訪問します。日本は十八名位ですから一度で終わります。このことは「アド・リミナ・



アポストロールム」と俗に申し、「聖ペトロ・パウロのお墓の前に行く」ということです。特に、聖ペトロの後継者である教皇様に接見することが大切な任務です。

教皇様は内外ともに超多忙な方ですから、日本では接見可能な日を司教団事務局から教皇庁宮内省に伺をたてます。何時も一、二週間の幅をもった月日が知らされますので、それを元にしてローマ訪問の日を定めます。教皇様との接見は最低四回で、それは個人接見(十五分)、団体接見(三十分)、昼食を一回、そして教皇チャペルで一緒にミサを捧げることで合計四回です。一つの接見の様子をお話ししましょう。どんな順序になっているのかわかりませんが、個人接見の前日の夕方に、宮内省から何時何分何処に来るようにと招待状がまいります。まず、所定の時間に行きますと、同時に招きを受けた四〜五人の司教様方と一緒に第一控室で待ちます。その時、宮内省のモンシーニョルが「貴方は教皇様と何語で話しますか？」と尋ねられます。日本の司教は英、仏、伊のいずれかの言葉を選ぶようです。私の場合、不十分ですが英語と申しました。次に、第二控室へ移って前の司教様の接見の終るのを待つのですが、その十五分間は緊張して、何を尋ねられるか、どうお答えしようかなどと色々気をもみました。いよいよ前の司教様が退場なさると、すぐに教皇様のお部屋に入ります。座るように指示され

て教皇様の横に座りますと、教皇様は机に大きな日本地図を広げて、「貴方の教区は何処ですか？」と尋ねられ、続いて総人口は？ カトリック信徒数は？ 司祭の召命は？ 修道女数は？ 小教区数、学校・施設数を尋ねられ、更にそれらの様子についてもお尋ねになりました。また、日本人の宗教、文化、技術についても尋ねられました。日本人は正月三が日に七千人以上の人が神社仏閣に参詣すると申しますと、「それは良いことですね。しかし、彼らの信仰は現世的で、神仏に対する信仰も大部分はハッキリせず、ボンヤリしたものでしょう」とおっしゃいました。「彼らは一神教でありませぬので、その通りだと思います」とお答えしたのを覚えております。は机下にあるベルを押されます。すると、直ちに御絵、ロザリオを持った秘書の方と写真屋が隣の部屋から入って来て沢山の写真を撮り、最後に二人での写真を撮って、サヨナラ、サンキューベリマツチ、ホーリーファザーとご挨拶して退場しました。私のアド・リミナは一九八〇年、一九八五年、一九九〇年、一九九五年の四回でした。



団体接見は順番に並んで、司教団会長が教皇様に感謝のご挨拶を述べ、教皇様が励ましの言葉をくださいました。

教皇様の昼食はポーランドから来た五〜六名のシスターが準備されるのですが、質素なものでした。食事の中の会話は英仏伊の言葉を使って、自由に色々なトピックスについて行われました。教皇様は食事の最後にお皿の油をパンで綺麗に拭きとって食べられました。これはシスターの食後の洗い仕事を助ける為ではないでしょうか。教皇様のおやさしい心に触れることが出来ました。

教皇様とのミサは綺麗に準備された祭服を着て、ゆっくりと捧げ



田中司教が語るエピソード(8)

▼エキュメニズムについて何か思
い出がありますか？

◆私は直接にエキュメニズムを担
当していませんでしたが、特に、
日本聖公会と親しくさせて頂きま
した。例えば、一九七九年九月二
十九日にアグネス教会で行われま
した八木京都主教の按手就任式に
参加したり、一九八三年一月二十
九日には京都新聞社長パウロ白石
英司氏の密葬を大原で八木主教と
一緒に共同司式をいたしました。

それにも招待されて
参加しました。法用
主教とも八木主教を
通して親しくさせて頂
きました。五月十
六日に日本聖公会組
織百年礼拝式が大坂
聖マリアアカテドラル
を用いて行われまし
た。これは聖公会に
二千人を収容するこ
との出来る大きな教会が無かつた
のでこうなったのだらうと思いま
す。この時にはカトリックの司教
団も招待されて参加しました。

一九八八年三月十四日に日本聖
公会の八木・法用主教とカトリッ
クの相馬・田中司教の懇親夕食会
をもちました。これは八木主教の
企画によるものと思いますが、八
木、法用、相馬の三人は雄弁で、
社交的で話題も多く、私はもっぱ
ら聞き手で相づちをうつ位でした
が、三人と親交を深めることが出
来て満足致しました。



度々日本聖公会の式に参加させて
頂いてキリスト教の中でも聖公会
の典礼や祭服がカトリックと殆ど
同じであることを知り感じました。

その他、京都にはNCC(日本
キリスト教協議会) 宗教研究所が
あり、私もその理事に加えられ、
年に二回程ですが理事会に出席し
て各派のプロテスタントの牧師さ
んとお会いし、諸宗教のことや財
務についての話し合いをもちまし
た。また、京都独自のこの集りを
KCCと言います。

▼今度は教区の平和運動について
簡単にお聞かせ下さい。

◆はい、教皇様は二十五年前頃か
ら毎年一月一日を「平和の日」と
してメッセージを送って下さいま
した。日本の一月一日は正月気分
で平和について深く考えたり、実
行に移ったりするのにはやや不都合
があるので十五年位前だったと思
いますが、日本の教会の為に司教
団は八月六日～十五日を「平和旬
間」と定めました。京都教区では
それに向けて「平和への歩み実行
委員会」を作って準備をすること
にしました。そして、「平和一斉
祈願ミサ」とか「中学生の広島平
和巡礼」、旬間中の日曜日の午後
に河原町三条から円山公園までの

「国際平和行進」などを企画し、
実行しました。それらは年々に盛
り上がっていききました。今の日本
には日本人ばかりでなく滞日外国
人も沢山いますので、彼らにも呼
び掛けてこれらの行事に参加して
もらいました。オリンピック程で
はありませんが、韓国、フィリピ
ン、アメリカ、カナダ、メキシコ、
エルサルバドル、ニカラグワ、
ブラジル、アルジェンチーナ、チ
リなど、色々な国の人が旗を持ち、
やさしい歌をスピーカーによるリー
ドに従って歌いながら行進しまし
た。こんなに国際色豊かな行列は
他宗ではあまり見られず、歩道を
行く群衆は珍しそうに眺め、京都
カトリックの名物の一つになりま
した。この平和行進は暑さと警官
の指示に従って歩くことで大変で
したが毎年五百人位の参加
者があったと思います。これも京
都教区ビジョンの精神から出た一
つの行動であると思われまます。

これらは平和旬間の一齣ですが、
「平和への歩み実行委員会」は一
年間を通じて、正平協や日本カト
リック部落問題委員会と連携して、
勉強会や合宿をしたりして真の平
和の為に努力し、祈りました。

田中司教が語るエピソード(9)

▼司教様はお墓の好きな司教様と
いうことを耳にした事があります
が、この事についてお聞かせ下
さい。

◆そう一九五二年十月に初めてイ
タリアの地を踏んだところはジェ
ノバでした。船の高級船員にジェ
ノバで見物するものは何かと尋
ねましたところ、直ぐに「カンポ
サント、聖なる島」すなわち、お
墓と教えてくれました。早速に地
図を買って市電に乗ってカンポサ
ントに行きました。そこは非常に
大規模で、石塔の大きさや形が色々
あり、時代によっても違って、ま
るで「死と復活」をテーマにした

博物館のようでした。

それから数年後に日本に帰り、
高松では屢カトリック墓地の草刈
りに通いました。京都に参りまし
てからは何時も墓地委員会には顔
を出し、若王寺、大日山、衣笠の
カトリック墓地にはよく通いまし
た。日本の習慣は、春秋のお彼岸
とお盆には墓参りをし、祖霊との
交わりを密にする祖霊信仰が定着
していますので、お墓を綺麗に掃
除することが福音宣教にもつな
がると思われました。そして、墓地委
員会の皆さんにも、十一月の死者
の月ばかりでなく、春秋とお盆の
少なくとも年に四回はお墓の掃除

を工面してしようと呼びかけまし
たところ皆さんが賛成してくださ
り、それからはカトリックの墓地
が綺麗になったように思います。

ミラノ、フイレンツェ、ローマ、
オランダ、パリなどヨーロッパ
の墓地を巡りましたが、ユデオク
リスチャン文化の復活の雰囲気
がありました。アメリカ、カナダも
同様でした。ホンコン、マカオ、
バンコック、台北、沖縄、日本は
また違った雰囲気をもっているよ
うでした。

私が墓参したお墓の中で最も古
かったのはイスラエルのダビデ王
のもので、これは三千年前のも
ので、建物の中に保管され、大き
さは三〇〇cm×一〇〇cm×一〇〇
cmで、それにダビデの星の布が被
せられていました。そして、奥の
台の上には無数の冠が飾ってあり
ました。イエス様の墓の跡、聖マ
リアの墓の跡も見学しましたが、
人間は「チリであり、またチリに
返ることを記憶すべし」と灰の水
曜日灰を頂いたことを思い出し、
どうしても復活のキリストに結ば
れた生涯を送らせて頂き、世の終
りに神の国に迎えられるねばなら
ないことを痛感いたしました。

いずれにしても、雑草が無く綺



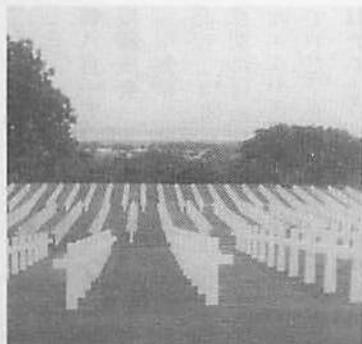
衣笠墓地



ダビデの墓

麗に掃除された墓地は気持ちの良
いもので、そのような教団の墓地
に葬りたいというのが人情かも
知れません。お墓をきれいにいた
しましょう。

「永遠の休息を彼らに与え、絶
えざる光を彼らの上に照らし給え
し」



マニラの米軍墓地

田中司教が語るエピソード(10)

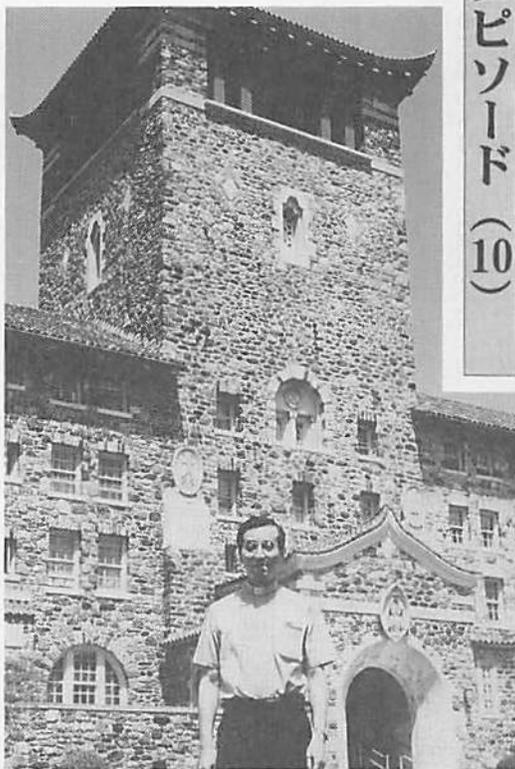
▼司教様は京都教区内で働く修道会の本部や宣教師を送ってくださっているご家族を表敬訪問なさったと聞きましたが、何処と何処を巡られましたか？

◆まず、アド・リミナ(司教の教皇訪問)でローマに行きました時、ローマに本部をもつノートルダム教育修道会や女子ドミニコ会に表敬訪問して感謝の意を伝えました。時には昼食をご馳走になったこともあります。



女子ドミニコ会のシスターと

一九八四年四月にカナダに行き、レデンブートルのトロント管区、ワイアートル会、レデンブートルのケベック管区、ついでにアメリカ



メリノール会ニューヨーク本部で

カの男子メリノール会本部、女子メリノール会本部へお礼参りに上がりました。

一九九一年四月にはアメリカのウチタ聖ヨゼフ会本部、セントルイスではノートルダム教育修道会とカロンドレッドの聖ヨゼフ修道会の管区本部、それから足を伸ばしてメキシコに行き、グアダルペの巡礼地とグアダルペ宣教会本部を訪れました。

一九九四年十月にはアイルランドへ行き、丁度ルーニー師がおられたので諸々を巡り、ルーニー師とオヘル師の母上にお会いして大事な息子さんを日本の宣教に送って下さっているお礼を申し上げま

した。一九九六年七月にはオーストラリアにウォルシュ師と一緒に行き、マリスタ会の管区長、善きサマリア修道会の総長に感謝の挨拶をして参りました。ついでに動物園にも行ってコアラを見物して



オーストラリアで

きました。日本では七月でしたがオーストラリアは初冬で、厚いセーターが必要でした。何処でもミッシェン地からの司教ということで親切に歓待して下さいました。日本の教会、特に、京都教区は外国からの宣教師にお世話になっているので感謝でいっぱいです。

もう一つ忘れておりましたが、一九九五年一月に教皇様がフィリピンに来られ、マニラ教区などの四百年祭が催されました時にも出席しましたので、その時、フィリピン宣教会の本部を訪ねて総長様にお会いし、タガイタイの神学校や神言修道会の大学を見せて頂きました。一月でしたが大変な暑さだったことを記憶しております。

(つづく) 文責・編集部

田中司教が語るエピソード (11)

▼京都は日本の古都で、宗教・文化の中心であることから沢山のVIP (偉い人) が来洛されたそうですが、どんな方が来られましたか？

◆そうですね、数えきれない程のVIPが短期、長期にわたって来

訪されました。パチカン関係の方で思い出すのは、セルジオ・ピニエドリ諸宗教長官、ジャン・ジャドウ諸宗教長官、フランシス・アリンゼ諸宗教長官、ベルナルディニ・ガントン司教省長官、ポール・パール文化長官、そして、ヨアキ



延暦寺でのガントン長官

ム・マイスナー枢機卿(ケルン)、カロロ・マリア・マルチーニ枢機卿(ミラノ)、ダニールズ枢機卿(ブリュッセル)、ジェラーダ大司教(駐アイルランド大使)、カマラ大司教(ブラジル)等々です。

ご案内した場所は、東京では明治神宮、名古屋では熱田神宮と南山大学、近畿では伊勢神宮、三輪明神、皇学館大学、天理参考館と図書館、東大寺、春日神社、そして比叡山延暦寺、高野山金剛峯寺、四天王寺、知恩院、二条城、東本願寺、天龍寺、東福寺、裏千家、龍安寺、平安神宮、三十三間堂、大本、一燈園、花園大学に永平寺などでした。

一人で全部を巡られた訳ではありませんが、ガントン枢機卿をご案内した時の思い出を一つご紹介しましょう。色々なところをご案内したあとで枢機卿様は「日本は何もかも異なっていますね。言語、食物、衣服、気候、家屋、自然など。ですが、一つだけ他と変わらない同じものがあるのに気付きました。それは私たちが同じヒューマニティー(人間)同志であること

いうことです」と素晴らしいことをおっしゃいました。私も本当にそうだと同感したことを記憶しております。



大本本部でのアリンゼ長官

来日された方の中で一番多くいらしたのはフランシス・アリンゼ長官でありましょう。彼は諸宗教長官ですから日本での催しに出席なさるために度々いらつしやいました。彼はナイジェリア出身で、

気さくな方なので日本の仏教界の方々とも深く交流をなさいました。その他、訪日された方の出身がブラジルやドイツなど色々多国籍でしたので、迎える日本側の宗教界の方々はカトリックが如何に普

遍的であるかをつくづく感じられたことと思います。また、来日された方はどの方も伊語、仏語、英語を自由に話されましたので、島国日本人との違いを感じられたと思います。

これらカトリックのVIPが日本の名刹寺院を訪れたことは、お世話が大変でしたが、日本のローカル(地方)教会にとっても大きなプラスであったと思います。

ガスバリー大司教やカルー大司教などの歴代の駐日パチカン大使はしばしば京都へおいでになり、教区をくまなく訪問して下さいました。新駐日パチカン大使アンブローズ・デ・パオリ大司教様もその内に来洛して下さいることを思います。(つづく) 文責・編集部



知恩院でのジャン・ジャドウ長官

田中司教が語るエピソード (12)

▼二十一年間の時の流れの中で、大切な司祭方や関係者を天に送られて淋しい思いを抱かれたと思いますが。

◆その通りです。或る人は割合若くして天に召されて、また急なことで早い生命を捧げられました。それぞれの人々を思い出してお祈りしております。二十一年の間に約二十六名の方が亡くなられました。それらの方々のお名前を申し上げます。

教皇パウロ六世 1977年8月7日。日本人グループが接見して10日目に亡くなった。



教皇ヨハネパウロ一世 1977年9月29日。一カ月の教皇であった。



駐日大使ロトリー大司教 1977年10月12日。ローマで。私を京都司教に推薦した大使。



田口枢機卿 1978年2月23日。阪大病院で。小神学校時代からお世話になった大恩人。

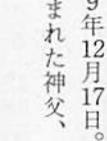
徳久清次師 1979年7月4日。津で。メリノール会の日系二世の神父。



平間三郎師 1979年12月17日。河原町で。植木を好まれた神父、急死された。



松田友明師 1982年1月2日。亀岡病院で。お正月早々に急死された。



パイオン修士 1982年2月7日。ウィアートル会。交通事故で亡くなった。



藤堂隆師 1982年5月24日。第一赤病院で。復活信仰で四カ月間闘病後に亡くなった。



田中英吉司教 1983年5月20日。聖マルチン病院で。叔父の司教で、七年間



闘病後亡くなった。駐日大使ガスバリー大司教 1983年6月24日。東京で。急死、東京カテドラルで盛大な葬儀挙行。



小山久木師 1985年12月26日。クリスマス・パーティーの後交通事故死。

古屋司教 1991年2月2日。富田病院で。京都教区初代の司教。十年前に倒れて半年で回復、一日の病いで急死された。

トム・オツカナー師 1986年10月。メリノール会。デンマークで事故死。

チャールズ・ポラス師 1992年9月6日。メリノール会。急死された。

丸山吉高師 1988年6月22日。富田病院で。古屋司教様の右腕、四カ月間闘病後亡くなった。

トニ・グリーン師 1994年12月1日。マリスト会。登美ヶ丘で。日豪友好親善に貢献。

母カタリナ静子 1988年6月25日。聖マルチン病院で。十年間闘病生活の後亡くなった。

マリア島雪枝 1996年3月7日。京大病院で。司教館のハウスキーパー。四カ月間闘病。

シュレーリング師 1988年9月6日。唐崎で。急性心不全で亡くなった。

Sr. マーガレット平沢 1996年8月20日。京大病院で。私の秘書。四カ月間闘病。

昭和田皇 1989年1月7日。富澤司教 1989年3月28日。札幌で。京都教区出身の司教、数カ月の病で亡くなった。

サレミンク師 1997年4月4日。フランシスコ会。四カ月間闘病後に亡くなった。

モーケンバー師 1990年4月21日。マリスト会。大和八木で。急死された。

ギニー師 1997年4月8日。マリスト会。奈良で。三カ月間闘病後に亡くなった。

地上の教会における損失は天上の教会の得、キリストの神秘体の信仰で祈り合って使命を完うしたものです。

(つづく)

田中司教が語るエピソード (13)

▼司教様は新任当時のお若い時は勢力的に内外共に活躍されたそうですが、やはりお疲れがたまりましたでしょうか？

◆確かにそうですね。私は元々壮健ではありませんので一九八〇年の末頃から体調を少し崩しました。寝込む程にならないよう医師とも相談して毎年短い休みをとりました。一九八一年と翌年の夏に五日間グアムにいきました。一九八二年の十一月には第一赤の人間ドックに入り、その結果、医師の勧めで一九八四年の早春に沖繩とグアムで、一九八五年にはサイパン島とセブ島で休養しました。けれど、一九八八年の年末に強度のストレスによる自律神経疲労となり、専門医の診察を受け、薬を飲むようになりました。それで一九八九年の一月に村上真理雄師と一緒にハワイへ行き、楽しましたが余り元気が出ず、その年の聖週間の司式を休んで西宮のトラピストで休養しました。そして相馬司教様と主治医の勧めで五月に東京の桜町病院に入院することにしました。けれども、病院では入院する程でも無いと言い、病院ではなくヨハ

ネ館特室という普通の部屋に滞在して色々な保養法を習いました。そして、約四カ月後に落ち着いたので京都に帰ってきました。

その年の九月末にジェラダ大司教がご兄弟と甥をお連れになって京都見物に來られましたので、彼らの大きい荷物を運んだり、あちらこちらをご案内したりしました。ところが

私の下肢部の調子が悪くなつて歩けなくなりましたので、大司教は見物をお早く切り上げてお帰りになりました。



自律神経が疲れ、再び専門医のお世話になりました。このようなことから下肢部の治療を少しおろそかにして調子が悪くなり、一

九九年の十月に本格的な検査を受けるために入院しました。その結果、血栓性大動脈下部硬化症と診断されて大手術を受けることになりました。一九九六年十一月三十日に京大病院に入院し、十二月三日に大手術を受けましたが、術後の苦しみはお話できない程度でした。話によりやすすと、手術の時、胃も腸も邪魔になるので外に出し、その下を走っている大動脈

困するという状態になりました。それで、京大病院の血管外科で診察と治療を受けることになり、門の家、京大病院、司教館と三方所に通う生活を約二年程続けました。一九九二年の秋には体の調子が大分落ち着きましたので司教館に帰り、そこから京大病院へ通い、治療を受けました。約三年間は心身に安定していたのですが、一九九六年の三月にストレスによって

の下肢部に分かれる三叉路の血管を人工血管に取り替えたそうです。術後、胃や腸を元にもどしたので、それらが正しい場所に収まるようにと手術の翌日から百メートル位歩かされました。一応、手術は成功したといわれて三週間程で退院しました。従ってその年のクリスマス夜の深夜ミサは、力弱い声だったかも知れませんが、司教として司式することが出来ました。これはひとえに皆様のお祈りと看護人のお世話のお陰と感謝致しております。何時まで続くか知りませんが、今も一カ月に一回京大病院の血管外科と自律神経のクリニックに通っています。

一九九七年六月十五日に大塚新司教が誕生いたしましたので私は肩の荷が軽くなり、有難いと思っております。私は一昨年の九月に高野の司教ハウス(以前に古屋司教様の居られた所)に落ち着き、病院、リハビリ、司教館通いと、受洗希望者に公教要理を教えたりして、引退生活を過しております。現在、割合に健康が安定しておりますので、一学校法人の理事長と五施設の理事と監事をしていきます。

神に栄光!! 神に感謝!! (完)